

『ヨーロッパの「イスラーム世界」発見』

羽田 正（東京大学東洋文化研究所）

報告者は、3年来何本かの論考を発表し、「イスラーム世界」という枠組みを用いて世界史を書くことの問題点を指摘してきた。その議論を補強し、発展させるため、今回の報告では、そもそも現在私たちが使用する「イスラーム世界」という概念は、いつどこに起源があり、元来どのような意味を持っていたのかという基本的な問題を考えてみた。主要な論点は以下の通りである。

1) ヨーロッパ諸語では、日本語の「イスラーム世界」に相当する言葉が2種類ある。例えば、英語の場合は、The Islamic World と The Muslim World であり、フランス語の場合は、le monde islamique と le monde musulman である。とりわけフランス語の場合は、二つの表現には明確な相違があり、前者が「イスラームが理想とする共同体」、後者は「現実にムスリムの住む空間」という意味である。

2) 18世紀以前のヨーロッパ諸語で記された「東方（オリエント）」に関する文献のうち、デルブロの『東洋全書』、シャルダンの『ペルシア旅行記』、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の内容を検討したところ、これらの文献には、ムスリムが多数居住する地域全体をまとめて「イスラーム世界」と捉える発想がなく、従って、「イスラーム世界」という言葉は現れない。「東方（オリエント）」の人々は、「トルコ人」「ベルベル人」「ムーア人」「サラセン人」などと「民族」を単位として別々に把握されている。

3) 「イスラーム」や「イスラーム世界」は、18世紀以前には存在しない概念であるのに、中世以来ヨーロッパの人々があたかもこれらの概念を知っていたかのように展開されるサイドの議論には問題がある。

4) 1883年のルナンとアフガーニーの論争においては、両者は「民族」の枠を超えてイスラームが強い影響を及ぼしている地域を表すのに「イスラーム世界」という語を用いて議論を行っている。従って、ギボン（18世紀後半）からルナン（19世紀後半）の100年の間に、「イスラーム世界」という概念が生まれた。

5) ルナンは、世俗化し、進歩する近代ヨーロッパに対して宗教的で停滞する社会という意味で「イスラーム世界」を用いており、そこにはマイナスの意味合いが込められている。これに対して、アフガーニーは、西洋植民地主義に対抗しムスリムをまとめるためのキーワードとして、プラスの意味を込めてこの語を用いている。

6) 「イスラーム世界」という概念が一般に受け入れられると、19世紀末までにはその歴史の叙述が試みられるようになる。しかし、そもそもこの語の意味には、プラスにせよマイナスにせよ一種のバイアスがかかっているのだから、その歴史を世界史の一部として叙述することには問題がある。

なお、本報告の内容は、当事者のムスリムによる世界認識、日本における「イスラーム世界」認識の受容とその後の展開という問題とともに、報告者の著書『イスラーム世界の創造』（東京大学出版会、2005年7月中旬刊行）の中で詳細に論じられているので、参照いただければ幸いです。